

婦中地域の縄文遺跡(2) 牛滑遺跡

うしなめり 牛滑遺跡の発掘調査概要

牛滑遺跡は富山市婦中町牛滑字天城^{てんじょう}地内、山田川左岸の河岸段丘（南北 200m×東西 100m、標高約 167m）に位置します。『婦中町史』の編纂中だった 1963（昭和 38）年 8 月 17～19 日、編纂委員の岡崎卯一氏の調査指導の下、牛滑地区有志と富山中部高校地歴クラブ生徒の参加を得て発掘調査を行い、縄文時代中期中葉（約 4,500 年前）の住居 3 棟と多数の土器、石器を検出しました。富山県内でも早い時期に調査された縄文時代の住居として、以後の考古学的調査に大きな影響を与えました。県内の縄文時代中期中葉後半を示す土器として「牛滑式」が設定されただけでなく、平地住居の構造が明らかにされた点で、学史的にも重要な意義があります。牛滑式土器は魚津市大光寺遺跡や砺波市松原遺跡から出土しています。



保存と活用

第 1・3 号住居付近は地元の人々の協力によって保存され、第 1 号住居が復元されました(写真 1)。現在は支柱^{おもぼしら}などが平面表示されています(写真 2)。遺跡の概要を記した看板も設置され、いつでも現地で縄文時代に思いを馳せることができ、学校教育でも活用されています。

牛滑遺跡の住居

本遺跡の住居は、史跡北代遺跡（北代縄文広場）のように地面を掘り窪めて床面とした竪穴住居ではなく、地面をほぼそのまま床面とした平地住居と推定されます。

第 1 号住居 現在の地表下約 30cm で検出され、中央やや南東寄りには長方形の石組炉^{いしぐみろ}があり、炉の底面には土器片^{しゅちゆうけつ}が敷かれていました。炉を取り囲むように 4 ヶ所の支柱^{おもぼしら}穴が配置され、付近には補助柱と考えられる小穴も 4 ヶ所ありました。補助柱は出入口や棚の支柱と推定されています。これらの外側には 15 ヶ所の柱穴が円形に配置され、中央に向けて斜めに穴が掘られていました（約 27～53cm）。これらは屋根の骨組みをなす垂木^{たるき}を据えるために掘られた穴と推定できます。垂木穴の分布から、本住居は直径 5.2～5.3m で、床面積が約 20.7 m²（約 11.1 畳）の円形住居と考えられます。北側の垂木穴の角度は約 46° でした。新潟県上越市和泉^{いずみ}A 遺跡の竪穴住居（図 1）は、遺存した垂木穴から垂木角度が約 40° と復元されています。北代縄文広場の土屋根竪穴住居は、約 35° で実物大復元されています。



写真 1 復元住居（岡崎 1967）



写真 2 現況（盛土保存と平面表示）

支柱・補助柱、桁・梁材の高さ 支柱穴は床面から約 13cm 掘り込まれていました。支柱や垂木は遺存していませんが、支柱は上端が二股に分かれた柱を使い、二股部分に桁・梁材を横に架け渡し、そこを支点到垂木を架けていたと考えられ

ます。北側の垂木角度（約 46°）から、主柱の二股部分（桁・梁材）の高さは約 1.7mで、南側の垂木はやや急角度（約 48°）に復元できます。このような骨組みの上に茅葺きして屋根をつくり、石組炉の真上には小窓（煙出し）を設けたと考えられます。地面を掘り込まない分、平地住居の屋根は竪穴住居より急角度になるようです。

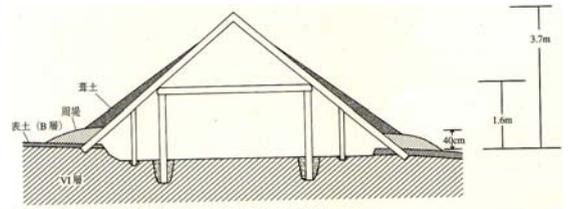


図1 和泉 A 遺跡の竪穴住居復元案
(新潟県教育委員会ほか 1999)

出入口の位置 (図 3) 垂木穴の間隔は、南側が狭く（最小幅約 80cm）、北側は広がっています（最大幅約 1.8m）。北側にある一対の補助柱（A・B）は間隔が約 1.2mで、その北西に位置する垂木穴を結んだラインと平行していることから、出入口の補助柱と考えられます。また、その位置と垂木角度の関係から、出入口支柱の高さは約 90cm に復元できます。石組炉が住居の中央ではなく、南東側に寄せられており、北西側から出入りしていたと考えられます。出入口（補助柱）から北西の垂木柱穴（間隔：約 1.5m）までを切通し状にして、北代縄文広場の復元竪穴住居のように跳上げ扉を架けていたのかもしれませんが。

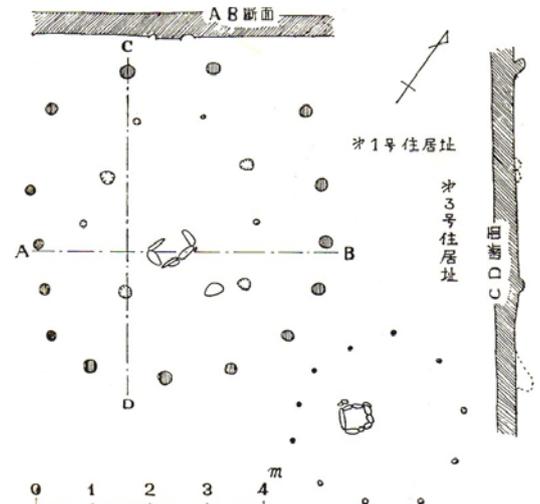


図2 発掘調査実測図 (岡崎 1966)

第2号住居 第1号住居の西方約 20mで確認されました。詳細は不明ですが、第1号住居と同様の構造と考えられます。

第3号住居 第1号住居の東隣で、直径 5~6cm、深さ約 30cm の小穴が 11ヶ所、直径約 3mの円形に巡って検出され、中央やや西南寄りに石組炉がありました。主柱穴がないことから、直立する壁に屋根を架ける構造と考えられます。類例は縄文時代前期の住居（山形県高島町押出遺跡）に認められます。

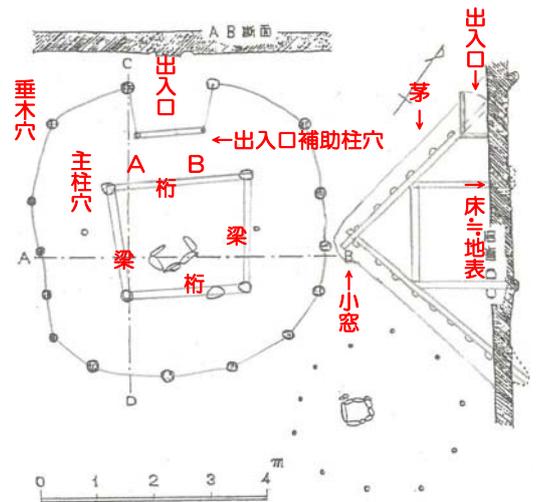


図3 第1号住居の復元案
(岡崎 1966 に加筆)

牛滑遺跡の暮らし

本遺跡では凹石（堅果類の殻を割る道具）と石錘（魚網のおもり）が多量に出土しましたが、石鏃は 1 点検出されただけです。史跡北代遺跡と異なり、石鏃が少ないことに注目すると、本遺跡を残した縄文人の暮らしは、狩猟中心ではなかったようです。竪穴住居と比べて、建築にかかる労力が少ない平地住居が築かれたことも考え合わせると、本遺跡は堅果類の収穫や山田川での漁業の拠点として営まれた、期間限定の住まいだった可能性があります。本遺跡の北西約 2km に位置し、竪穴住居が建てられた小滝谷遺跡などが日常的な定住の場だったのかもしれませんが。

参考文献

- 岡崎卯一 1966 「婦中町牛滑遺跡の調査」『大境』第 2 号 富山考古学会
 岡崎卯一 1967 「町のあけぼの」『婦中町史』 婦中町役場
 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1999 『上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉 A 遺跡』
 藤田富士夫・山崎 栄 1996 「縄文文化の繁栄」『婦中町史 通史編』 婦中町